

宮本武蔵伝

<はじめに>

剣豪、剣聖と言われ、江戸時代から今日まで多くの物語や小説で著され、皆さんご存知の仁です。

小説で最も人気のあるものは吉川英治作の「宮本武蔵」でしょう。本をお読みになった方、お読みにならなくても映画やテレビ制作の宮本武蔵の多くは吉川英治が原作ですからストーリーはご存知の方がほとんどだと思います。

宮本武蔵は16世紀末から17世紀半ばまで無敗の兵法者（武芸者）として活躍した実在の人物です。

しかし吉川英治「宮本武蔵」に出てきて脇役として活躍する又八（武蔵の竹馬の友）、お通（武蔵を慕う娘）、お杉婆（又八の母親）は創作上の人物で架空の人です。この三人が登場して吉川英治「宮本武蔵」は人気を博し、発表の昭和10年より今日まで続く大ベストセラーです。

戦後になって、柳生武芸帖で有名な五味康裕が「二人の武蔵」を著わしました。武蔵が二人いないとつじつまが合わないと言うことで。しかしかなり異説と言えるでしょう。

吉川英治や五味康裕に対抗して司馬遼太郎が「真説宮本武蔵」を著わしました。もちろん武蔵は一人で、又八、通やお杉婆は出てきません。

この宮本武蔵は在世の時から有名な仁で、没後の江戸時代から多くの作家によって伝記が書き著されてきました。

史実として実像の武蔵のことがはっきり分かっていることが限定的で、それにより伝記は脚色された部分が多くなり、真実の武蔵はどうだったのか今日の専門家の間でも議論が定まりません。

ここで宮本武蔵の実像を探って見ることにしましょう。

目次

はじめに

1、史料から見る宮本武蔵の実像

- (1) 出身地
- (2) 名前とお父さん
- (3) 誕生と死没年
- (4) 容貌

- (5) 試合
- (6) 養子宮本伊織
- (7) 大戦に参戦
- (8) 晩年

2、「^{ごりんのしょ}五輪書」と絵画

- (1) 五輪書
- (2) 武蔵の絵画

3、武蔵の伝記

- (1) 小倉碑文
- (2) 二天記
- (3) その他の伝記

おわりに

1、史料から見る宮本武蔵の実像

宮本武蔵についての記録は本人が書いた兵法書（剣術の本）「^{ごりんのしょ}五輪書」、が確かで、次に武蔵の没後九年目に武蔵の養子の伊織によって建立された顕彰碑に刻まれた「^{こくらひぶん}小倉碑文」（武蔵の経歴書）となります。

更に武蔵の弟子の子孫が書いた「二天記」（武蔵の伝記）となりますが、これは武蔵没後130年も後に著された伝記で、上記「五輪書」と「小倉碑文」を基に脚色して話をふくらましたもので、信憑性に問題があるところが多々あります。

この三史料の概要については後述します。

江戸時代以降多くの作家、そして吉川英治も五味康祐も司馬遼太郎もこの三つの史料をもとに宮本武蔵を書いてきました。

ここではこの三つの史料をもとに、適宜他の史料も参考にして武蔵の実像を見てみます。

(1) 出身地

二か所の説に分かれます。

①播磨国（兵庫県）説

- 「^{ごりんのしょ}五輪書」（武蔵の自著）の序論によりますと“^{しょうこくはりま}生国播磨の武士”とあります。

- 「二天記」（武蔵の弟子の子孫編集の伝記）は“播磨に生まれる”
- 「^{はりまかがみ}播磨鑑」（18世紀中頃の編集の地誌）では“^{いっとうぐんいかるが}播磨国揖東郡 鵜辺の宮本村の産”（兵庫県揖保郡太子町宮本）

②^{みまさかのくに}美作国（岡山県の東側の地域）説

- 「^{とうさくし}東作誌」（19世紀の編集で、世に出たのは明治42年）によりますと、^{あいだ}美作国英田郡宮本村”（岡山県美作市宮本）

史料的には上記、播磨国（兵庫県）と美作国（岡山県）の二説に分かれます。

「小倉碑文」（養子宮本伊織が建立）では生まれは播磨としながら、“初めて播磨に行って戦う”と、播磨生まれではないと取られる矛盾した一文があります。

吉川英治も司馬遼太郎も美作説をとります。（司馬は美作に生まれて母親の実家の播磨で育った説）

江戸時代は播磨説が通説でしたが、明治に「東作誌」（美作国の東側の郷土史）が世に出てから美作説が一般説になりました。

今日では、武蔵が自分で生まれを播磨（兵庫県）と書いている（五輪の書で）のだから兵庫県と考えることが妥当だとの意見が多くなっています。

播磨で生まれて美作に養子で行ったとの説もあります。

現在両県の地で記念碑等があり、どちらの住民もご当地説を主張します。

（2）名前とお父さん

- 新免武蔵守藤原^{はるのぶ}玄信（「五輪書」）
- 新免の後裔武蔵玄信、二天と号す（小倉碑文）
- 新免武蔵藤原玄信、外戚の氏姓の宮本も使う（二天記）

書状では自分で宮本の姓も名乗っています。新免は兵法関係で名乗り、そ

の他武士としての名は宮本を名乗り、書画では二天の号を使っていたとの説が今日通説です。

父親のことは確かな史料には載っていません。

「二天記」には、“父は新免無二介信綱、新当流 十手を使う。吉岡憲法（京で道場を構える名人）と試合し2勝1敗”

「武州伝来記」では、“宮本無二、十手が得意、武蔵は父親と喧嘩して播磨の母が方の叔父を頼る”

「武州伝来記」は武蔵没後70年を経て書かれたもので信憑性に問題ありとされています。

(3) 誕生と死没年

死没年月日ははっきりしています。

1645年（正保2年5月19日）です。享年62歳

生年は1584年（天正12年）。

亡くなった年月日については、晩年は熊本の細川家の客分待遇で暮らしていて、友人、知人、弟子たちとの交流がさかんでしたので間違いありません。

生年は、武蔵の自著の「五輪書」の序文に書かれている当時の年齢60歳から計算すると1584年となります。

養子伊織の子孫が残した家系図では生まれは1582年生まれになるのですが、この宮本家の家系図は19世紀に入ってからのもので、信憑性に問題があるとされています。

だいたいの研究者の皆さんは62歳説をとります。

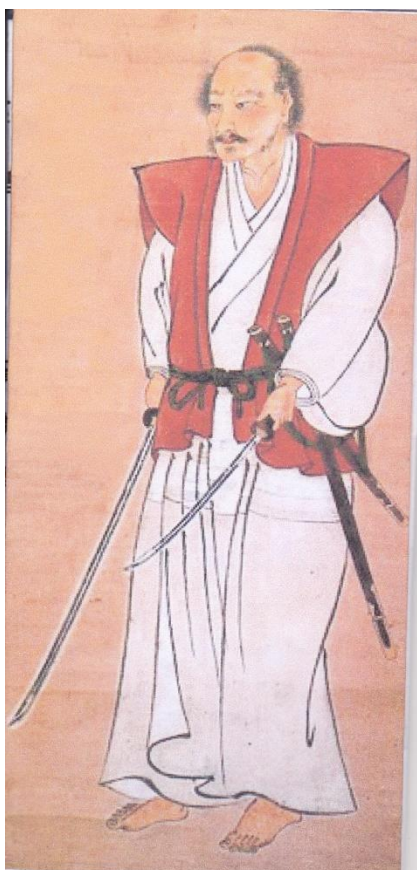
(4) 容貌

左図をご覧ください。

武蔵の肖像図は何点か残っているのですが、島田美術館蔵の物が有名です。

白い小袖の上に赤い肩衣を着けて、右を向いて真っすぐに立っています。右手に長刀、左手に短刀を下段に軽く構えており、自然体の構えと言えます。

相手との間が大分ある時の構えと思えますが、名人とはこんな構えかと思わせます。



この絵は武蔵没後すぐに関係者がプロの絵師に描かせたものと言われています。

絵から見ますと痩せ型の長身のようにです。

(5) 試合

史料的に一番信頼が高い自著の「五輪書」^{ごりんのしょ}によりますと、

“13歳で初めて勝負し、新当流有馬喜兵衛に勝つ。16歳で但馬国の兵法者に勝つ。21歳で京で数度の勝負。29歳まで諸国の兵法者と六十余度戦い負けを知らず。”

武蔵自ら著した「五輪書」では我々が良く知る京の吉岡憲法や奈良の宝蔵院流との試合のことをふれていません。

“京で数度勝負した”とあるので、これが吉岡憲法のことかもしれません。さらに肝心の佐々木小次郎との巖流島での一戦のことは全く触れていません。

しかしかの有名な巖流島の一戦をまったく触れないで、良く知られない有馬喜兵衛の名前をあげているのは解せません。

しかしまあ「五輪書」は武蔵が著わした兵法書（剣術の方法）で彼の自叙伝の部分は主な部分ではないのですが、かれの履歴の部分には問題ないとしましょう。

次に信用されています「小倉碑文」では吉岡憲法と一戦については書かれています。

巖流島の一戦も書かれているのですが。佐々木小次郎の名前は“岩流”^{がなりゅう}としか書かれていません。

巖流島の一戦のことは「二天記」（元ネタは「五輪の書」、「小倉碑文」）では詳しく書かれており、岩流は“岩流小次郎”と名付けられます。

我々が知る名前“巖流佐々木小次郎”の名称は19世紀に入って武蔵について書かれた物語でつけられたようです。

(6) 養子宮本伊織

武蔵は結婚しませんでした。伊織を養子にする前に三木之助と言う子とその弟を養子にしますが、二人とも若くして亡くなります。

1626年（寛永3年）伊織を養子にして、かねて昵懇の明石の大名小笠

原忠真^{ただかね}に仕えさせます。伊織は才能のある人で、すぐに小笠原家の重臣なり、忠真が明石から小倉に移封された後に起こった島原の乱（1637～38年）に忠真に従い参戦し手柄をたて、戦後家老（4千石）に昇進しました。

伊織は武蔵とは元々親類との説もありますが分かりません。

伊織は武蔵没後、小倉に武蔵を称えて顕彰碑建てました。この碑に上述で引用してきました武蔵の経歴「小倉碑文」が記述されているのです。

（7）大戦に参戦

武蔵の存命中のこの時代に大きな戦いが三つありました。即ち関ヶ原の戦い、大坂の陣、島原の乱があります。

①関ヶ原の戦い（1600年）

徳川家康と石田三成との関ヶ原の戦い（1600年）には参戦したようですがはっきりしません。

西軍に一兵卒で参戦した説は吉川英治「宮本武蔵」がとります。

別の説があります。

関ヶ原の戦いの時に、九州で黒田如水が立ち上がりました。この黒田如水の陣に武蔵は駆けつけました。黒田如水は勝ちましたが、如水は戦後徳川家康には評価されませんでした。家康には了解を得ず勝手に戦ったからです。むしろあやしい戦いと疑われました。よって如水は占領地はもらえませんでした。

よって如水陣に参戦した侍達には戦後恩賞なく解き放ちでしたので、武蔵も戦い損であったとの説があります。

因みに戦後黒田家が加増され福岡に領地をもらったのは関ヶ原で勲功のあった如水の息子の長政の働きによるものです。

②大坂の陣（1614～15年）

武蔵は徳川軍で参戦しましたが、具体的な内容が分かりません。

大きな手柄をたてたなら領地をもらったはずですが、記録にはありません。

③島原の乱（1637．1638年）

養子伊織は小倉藩主の小笠原忠真の重役になっており、島原の乱に主君に従って参戦しました。その時武蔵も伊織に付き添って参戦しました。幕府軍が乱を鎮圧後、伊織は戦功により家老に昇進しました。

武蔵は戦場で負傷して功労はありませんでした。

これにつきましては有馬直純（乱に参戦）宛宮本武蔵書状（自筆、原文）が残っていますので間違いありません。

いずれにしましても武蔵自身は大きな手柄を立てた様子はありません。

（8）晩年

宮本武蔵は青年期は兵法家として活躍し、名をあげていたのである程度は分かります。

しかし30歳から熊本に現れる59歳（1640年、寛永17年）までは断片的なことしか分かりません。

大阪の陣に参戦（活躍の内容不明）、伊織を養子、島原の乱に参戦したことだけす。

しかし武蔵が当時兵法家として有名人であったことは間違いありません。

大名では細川忠利（熊本藩主）、小倉藩主小笠原忠真、日向延岡藩主有馬直純や細川の家老長岡興長等々と知己あるいは友人は多数いました。

徳川家をはじめ兵法が好きな大名が召し抱えたいと申し出ましたが、俸禄のことで折り合いがつかず話は流れたとの逸話が残っています。

晩年ははっきりしています。

1640年（寛永17年）に熊本に現れます。1638年の島原の乱に参戦後は江戸にいたようです。

誰を頼って、又誰の誘いで熊本を訪れたか分かりません。年は57歳でした。

兼ねて知友の細川^{ただし}忠利の家老長岡興長に“熊本に来ている”と書状を出しています。（自筆原文が残っています）

武蔵を高く評価していた藩主細川忠利と家老長岡興長は武蔵を熊本の地に引き留めるべく相談しました。

待遇については武蔵に礼を失しないように、かといって譜代の家臣とのバランスのこともあり過分の俸給は出せないことから、当初は七人扶持、合力米十八石、後に三百石を追加支給で、住まいは熊本の千葉城跡に居宅を与え、客分待遇としました。

武蔵はこの処遇に満足して、兵法伝授を藩士に行い、又、絵画、工芸、茶道、連歌に熱心でした。特に絵画への評価は今日おいても高いのです。

熊本で亡くなる1645年までの5年間で、有名な絵画（墨絵）は描かれたのです。

2、「五輪書」^{ごりんのしょ}と絵画

(1)「五輪書」

武蔵が著わした兵法書「五輪書」^{ごりんのしょ}が最も有名ですね。名前だけは聞かれた方は多いと思われます。

この本の以前に武蔵が細川忠真に求められて提出した「兵法三十五個条」がありますが、これが土台と言われています。

「五輪書」の自筆原本は残っていません。武蔵の没後、高弟（寺尾孫之丞、^{しばとうよしのり}芝任義矩）が原文を写したものの、更にそれを写したものが残っています。

「兵法三十五個条」は自筆原文が残っていますから、その絡みから「五輪書」はまず武蔵の著であると言って間違いないとされています。

内容は兵法書ですので剣（刀）の使い方についてが主ですが、試合での精神的なことも記述し、更に序文では自分の経歴（上述）を書いています。経歴の部分は多くはありません。

五輪というのは編集が地の巻・水の巻・火の巻・風の巻・空の巻の五つになっていることからです。

地・水・火・風・空の五輪は仏教で物質構成の五つとされています。そこから取ったのでしょう。

あらましの内容は次の通りです。

<地の巻>

序論： 我が兵法の名を二天一流と名付ける

出身地、姓名、年齢、試合歴（上述1、（1）、（2）、（3）、（5）
ご参照）

兵法は武士の法である。

武士は文武二道が必要である。

兵法のあらましを説く。（総論）

剣術だけでは剣の道をするには出来ない。

武士は二刀を着けるので二刀一流という。

刀や脇差は片手で持つ武器である。両手で構えるのは実戦的でない。

太刀を二つ持つのは、大勢の相手の時に利点があるからである。

著者注：武蔵以外の剣術は刀を両手に持って構えて相手に打ちに又斬りに
いきます。現在の剣道もほとんどそうです。

西洋でも中国でも刀（剣）は片手で持って相手に斬りに行きます。
武蔵の言う片手で持つのが世界的には一般です。

武蔵は通常二刀を持って戦ったと言われていますが、試合の時は
一刀であったとの説が現在有力です。

現在の剣道では二刀を持って戦うことは許されていますが、使い手は
少ないようです。

兵法の道を鍛錬するにあたっての心構え。

- ① 邪心を持たない
- ② 二天一流を鍛錬する。
- ③ 広く諸芸（武芸）に触れる。
- ④ さまざまな職能の道を知る。
- ⑤ 利害得失をわきまえる。
- ⑥ 判断力を養う。
- ⑦ 目に目えぬ本質をさとる。
- ⑧ わずかなことも気を付ける。
- ⑨ 役にたたないことをしない。

<水の巻>

“技の教えです。”

心を水のようにする。水は四角い器、丸い器で形を変える。大海となる。
一を知って万を知る。

平常の心をもって臨む。

戦闘の姿勢、目つき、太刀の持ち方、足さばき、五方の構え、太刀の道、五つのおもて（技の形）等々で剣術の具体的な技の教えです。

五方の構え、五つのおもては五つの構えと技の形を教えています。二刀を使つての技は教えていません。

二刀流での刀の使い方は武蔵は教えたのですが、直伝が残っていません。武蔵没後に弟子が書き残したものはあります。

剣術、剣道の素人の著者には難解ですので具体的な内容は省略させていただきます。

<火の巻>

“試合に臨んでの対処の仕方です。”

火は大きくもなり小さくもなる。一瞬を争う。

太陽を背にして、明かりを後ろにして敵に向かう。

敵より高い所に位置する。

ここらあたりは分かるような気がします。

三つの先、枕を抑える、渡をこす、けいきをおさえる、剣をふむ等々後

30項目ぐらひは素人の著者には意味不明な所がほとんどです。よつて省略します。

<風の巻>

他流試合についての対応を解説しています。

世間の兵法をしること。

他流の批判

<空に巻>

道理を体得してもこだわらない。

心理、哲学的で難解故省略します。

この書は兵法書です。即ち剣術において、刀（太刀、脇差、小刀）の使い方、太刀さばき、敵との戦い方そしてその時の心理面について語っています。

兵法とは、剣術以外に槍術、弓術、柔術等武芸百般を入れ、更に軍陣、軍学をも入れる広い意味もありますが、「五輪書」では対象は剣術のことです。

武蔵は剣術（兵法）やその他の武術を含めては武芸と言ひ、軍陣のことは大

兵法と言っています。

尚、「五輪書」は武蔵の著述を弟子の寺尾孫丞が筆写したもので言われていますが（原文消失）、「五輪書」は未完で最後の空の巻は寺尾孫丞が生前に武蔵から聞いていた内容をまとめたものと言う説もあります。（空の巻は他の巻に比べて文字数が少ない）

合気道は少々やりますが、剣術は柳生新陰流のさわりを習った程度で、剣術の素養がほとんどない著者には大変難解です。

ここで戦国時代、江戸時代の剣術の流派について少々触れておきます。

武蔵の流派は二天一流と言います。本人は二刀流とは称さなかったようですし、試合では一刀で戦い、二刀で戦った記録がないそうです。

「五輪書」にも二刀に限定しての刀のさばきについては記述していません。二刀は大勢を相手にする時に便利だとは言っています。

しかし武蔵の二刀流が武蔵亡き後弟子たちに受け継がれていき、現在剣道でも二刀の使用は可能ですが、江戸時代以降今日まで圧倒的に主流は一刀を両手で持って、構えて、両手で撃つ、突く刀法です。

江戸時代の流行った流派は時代小説をお好きな方はなじみがあるかと思いますが、ここで概略整理します。

剣術の流派の発祥は戦国時代の後半の16世紀の初め頃とされています。

先ず、長威斎が新当流を打ち立て、その流れの松本信綱の鹿島神流。更にその流れの塚原ト伝です。

上泉伊勢守信綱（秀綱）は鹿島神流や陰流を学び新たに新陰流を打ち出します。

新陰流の相伝は柳生石舟斎の柳生新新陰流に引き継がれます。その外新陰流の系列には丸目蔵人佐のタイ捨流があります。

新陰流と全く別系統に伊藤一刀斎景久開祖の一刀流。その系列の小野次郎右衛門忠明（神子典膳）の小野一刀流、幕末に千葉周作の北辰一刀流。

そして別系統の相馬四郎兼光開祖の念流、その系列の馬庭念流等があります。流派は江戸時代、これらの流派から無数に分かれますが、みんな〇〇新当流、〇〇新陰流、〇〇一刀流とか〇〇念流と称します。

武蔵の二天一流（二刀流）は武蔵没後ははやりませんでした。

二刀を使って相手に向かうことは尋常の人では難しいと言うことでしょう。現在の剣道では二刀は認められています、使う人は少ないようです。剣道のテレビ中継において中継以前に負けてしまうのか見たことがある人はほ

とんどいないでしょう。

現在の剣道は、上記流派を基にルール決めら技を選定されており、技は面打ち、胴打ち（左右）、小手打ち、喉又胸への突きに限定されています。戦場で一番有効と思われる足への攻撃はルール違反です。

しっかり打ち込まないと一本と判定してくれません。

二刀流は当然片腕で相手に打ちこみますので、当たっても打ち込みが緩いとして一本の判定になりにくのです。剣道には柔道と違って一本に近い“技あり”の判定はありません。

二刀流は江戸時代も現在も盛んになりません。

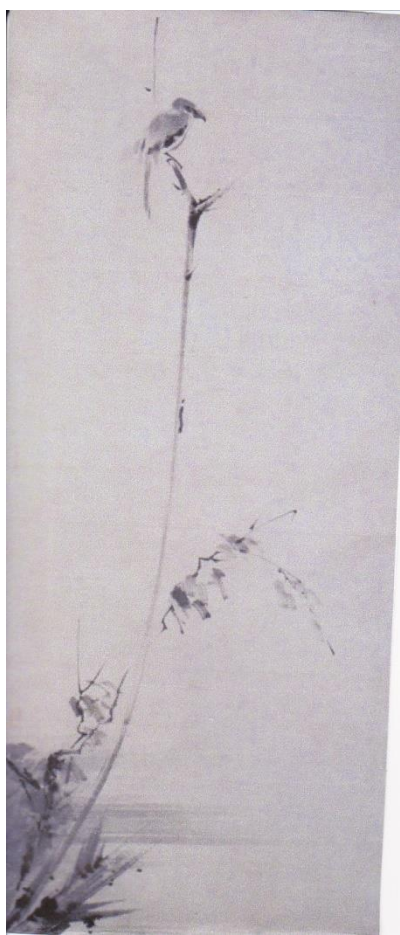
「五輪書」が戦後有名になったのは、経済人が経営哲学書とみなして読み始めたからと言われています。つられてサラリーマンも。

経営哲学書としてお読みになるのは勝手ですが、この書はやはり剣の使い方、剣術の書です。一般人には難解なところがほとんどです。

武蔵が自分の戒めか、弟子への教えのためか不明ですが、「独行道」という箇条書きの人生訓を書き残しています。

この方が一般人への教えと思えます。詳細は省きますが、一例としては、“仏神は貴し、仏神は頼まず”（仏神は貴いが、仏神には頼らない）があります。

（2）武蔵作の絵画



武蔵の作と言われる絵は達磨の絵、馬の図、鴨の図等何点も残っています。

最も有名なものは「^{こぼくめいげきず}枯木鳴鴉図」（和泉市久保惣美術館）が有名ですね。左図をご覧ください。

^{もず}鴉が一本の細い枯れ木の上の方に止まって、同じ木の下の方中ほどにはりついている芋虫を狙っている図です。これが実にすばらしい筆タッチで美術専門家は高く評価し、重要文化財に指定されています。

しかしある専門家は“武蔵はうまいと言っても素人の絵描きである。他の武蔵の絵に比べ「枯木鳴鴉図」はうますぎる。専門家絵師のタッチである。この絵だけは武蔵の作ではない。”との主張

もあります。

武蔵は落款（自筆署名）や印章を押したものも少なく、印章のほとんどは武蔵没後誰かが印章を作って押したものとされています。だからと言ってその絵が武蔵の作ではないとは言えないそうです。

今も昔も素人の絵には落款や印章はないのが普通だからです。

しかし武蔵の自筆か否かの判定は難しいそうです。

尚、永青文庫（細川家の美術館）にも同じ名で「^{こぼくめいげきず}枯木鳴鶉図」があります。図柄は少し違います。

3、武蔵の伝記。

（1）小倉碑文

最も信頼できる経歴は武蔵の自著の「五輪書」（概要は上述）の序文ですが、次に「小倉碑文」です。

「小倉碑文」は北九州市小倉にある4、5Mある石碑に、千百余文字の武蔵顕彰碑に刻まれています。

1654年（承応3年）に武蔵の養子の宮本伊織（小倉藩家老）が建立したものです。

但し文章は武蔵の高弟の寺尾孫之丞が撰文したのではないかとされています。

武蔵が亡くなって9年目ですので内容に信頼性は一応あると見るのですが、一部虚構もあるとされています。

対戦の試合は、播州の有馬喜兵衛や但馬国の秋山某と戦って勝つ記述は「五輪書」と同じですが、京での吉岡憲法との戦いは内容を記述されています。

「五輪書」では“京へ上り天下の兵法者に会って数度の勝負を決した”とだけで吉岡憲法との試合の内容は語っていません。試合をやっていたとしてもこの部分に脚色があるのではないかとされています。

後は岩^{いわりゅう}流との一戦を書いています。佐々木小次郎と言わず岩流とだけです。

（「五輪書」では巖流佐々木小次郎との試合のことは一切ふれていません。）

その外よく知られる奈良の宝蔵院流との試合や鎖鎌の宍戸梅軒との試合のことも書かれていません。

（2）二天記

武蔵の弟子の子孫豊田景英が、親が著わした武蔵の伝記「武公記」を更

に脚色したもので、武蔵死後130年あまりたったの制作で、「五輪書」や「小倉碑文」を大幅に脚色したものとして、史料的には信頼されていません。

しかしながらこの伝記「二天記」基に後世さらに脚色され、ふくらまされた物語、小説、講談の宮本武蔵がいくつも出来ました。

ついには吉川英治の「宮本武蔵」は、この「二天記」と「小倉碑文」と「武州伝来記」をネタ本にして大部となりました。

この「二天記」につきましては上述の中でも引用してきましたが、ここでは内容の特色を取り上げます。

武蔵の父親が十手が上手な兵法家として取り上げられています。

武蔵の氏名、出生についてもあります。出生地は播州で、「五輪書」や「小倉碑文」と同じで、美作ではありません。

試合歴は、播州の有馬喜兵衛、但馬の秋山某との対戦記は「五輪書」と「小倉碑文」と同様に取り上げています。

吉岡清十郎（憲法）との対戦を取り上げています。「五輪書」にはありませんが、「小倉碑文」にはあります。

槍の宝蔵院や鎖鎌の宍戸某、波多野二郎左衛門、夢想権之助との対戦を記しています。「五輪書」や「小倉碑文」にはありません。

ここらあたりは創作でしょう。後世の小説には必ず載せられます。

^{がんりゅう}岩流小次郎との試合を詳しく記述しています。「五輪書」にはなく「小倉碑文」には記述があります。

小倉碑文では対戦相手の名は、^{いわりゅう}“岩流”ですが。ここでは^{いわりゅうこじろう}“岩流小次郎”です。佐々木は入りません。我々が知る“巖流佐々木小次郎”とのフルネームは19世紀に入ってから創作物語からでしょう。

合戦への参戦は、関ヶ原、大坂の陣、キリシタン一揆（島原の乱）の参戦記録があります。「小倉碑文」では関ヶ原と大坂の陣の記載があります。

この参戦での功労についてははっきりしませんが参戦したであろうとの見方が現在大方です。

(3) その他伝記

大変多いのですが、後世の物語、小説に引用されてきた上記以外の代表的な伝記は次の通りです。

しかし史料としては内容的に信頼性が薄いとされています。

○東作誌

みまさかくに
美作国（岡山県の東部）の東部を東作と言い、この地区の地誌で19世紀中ごろに編集されました。

武蔵の出身地を東作の地とします。（美作国英田郡讚甘大字宮本）

武蔵伝を含むこの地誌は明治42年に以降一般的に知られるようになり、以降武蔵の美作国生まれが徐々に有力になり、明治以降の小説の多くは美作説をとります。今日の研究家は播磨国説を取る人が多いようです。

○武州伝来記

福岡の黒田藩の家来立花峯均の著作で、1729年の作とされています。（武蔵晩年の熊本細川藩とともに福岡黒田藩の家来の子孫に二天一流が伝わっています）

この伝来記は武蔵は播州の産としています。

○播磨鑑

播磨国の医師平野庸脩が18世紀中ごろに編集した地誌で、宮本武蔵の出生地が記述されています。

はりまくにいつとうぐんいかるが
播磨国揖東郡鵜の辺宮本村の産

<おわりに>

宮本武蔵については呼び方はいくつかあります。宮本武蔵、新免武蔵、二天等。出生地については播州国宮本（兵庫県の西）か美作国宮本（岡山県の東）で論争があります。対戦試合は実際と物語が混在してはつきりしません。戦場での戦いも関ヶ原の戦いの折、関ヶ原で戦ったのか九州で黒田如水の下で戦ったのかはつきりしません。大阪の陣での功労ははつきりしません。島原の乱では負傷して功労はなかったようです。

伊織を養子にしたこと、晩年熊本で細川家の客分として遇され、兵法家として指導、「五輪書」等の執筆、素人離れした墨絵の制作、彫刻、連歌、茶にも熱心だったことははつきりしています。ただの武術家（兵法家）ではなく教養人

であったと言えるでしょう。

29歳までの試合の全容がはっきりせず、30代から熊本に現れる57歳までの間の出来事は断片的にしか分かりませんが、晩年の熊本での5年間の活動ははっきりしています。

江戸時代初め、兵法家として宮本武蔵（兵法家としては新免武蔵と言うとの説があります）は有名でももちろん存在したことは間違いありません。

そして武蔵が大名やその重臣クラスと知友であったことも事実です。

在世中から有名人であるわりに分からないところが多い仁なのです。それ故後世脚色された物語、講談や小説が作りやすく人気を博したとも言えます。

以上

2017年5月23日

梅 一声

参考文献

- 1、宮本武蔵 大倉隆二 2015 吉川弘文館
- 2、五輪書 宮本武蔵 大河内昭爾 訳 1980 教育者
- 3、宮本武蔵五輪書 神子侃 訳 1963 徳間書店
- 4、日本武道全集 第一巻 (二天記・兵法三十五個条・独行道)
今村嘉雄編 1966 人物物往来社
- 5、日本武道全集 第二巻 今村嘉雄編 1966 人物往来社
- 6、国史大辞典 宮本武蔵 島田貞一
- 7、宮本武蔵 魚住孝至 2002 ペリかん社
- 8、近世肥後の文武 2007 島田美術館編集・発行

- 9、近世実録全書第七巻 坪内逍遙鑑選 1928 早稲田大学出版部
- 10、随筆宮本武蔵 吉川英治 2002 講談社
- 11、宮本武蔵(一)~(八) 吉川英治 1989~90 講談社
- 12、宮本武蔵 司馬遼太郎 1999 朝日新聞社
- 13、真説宮本武蔵 司馬遼太郎 1983 講談社
- 14、二人の武蔵 五味康裕 1981 新潮社
- 15、宮本武蔵資料集 歴史人物研究会 2016 kindle